

日本留学試験の「日本語」シラバスを再考する ー「アカデミック・ジャパニーズ」という概念を教育に埋め込む試みから

堀井恵子(武蔵野大学) k_horii@musashino-u.ac.jp

キーワード：問題発見解決能力、アカデミック・ジャパニーズ教育、「日本語シラバス」

要旨

本稿では、留学生と日本人学生に対するアカデミック・ジャパニーズ教育の必要性を述べ、その可能性を、授業実践の試みを紹介するとともに考察し、その上で、アカデミック・ジャパニーズの定義のための図と授業のためのシラバスから「日本留学試験」の「日本語シラバス」を再考する。

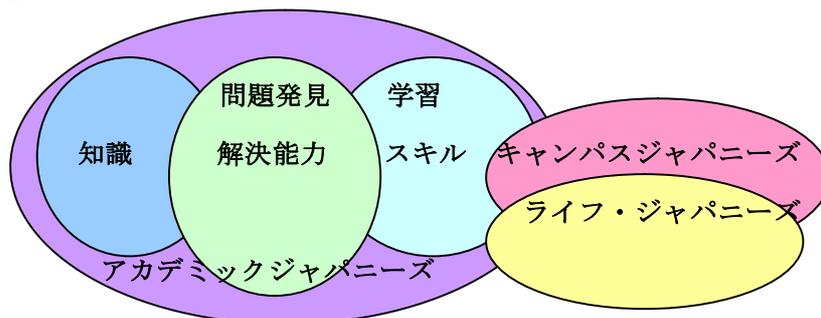
グローバル・スタンダードで留学生教育を考えていく時代となった今、日本語の汎用性はさておき、日本の大学の教育の質が大きく問われていくだろう。教員には豊富な知識を伝えるだけでなく、「学び」のための環境設定力が今まで以上に必要とされてくるであろう。その意味では、アカデミック・ジャパニーズという概念からの示唆が大いに生かされていくのではないだろうか。

1. はじめに：アカデミック・ジャパニーズとは

2002年度より、それまで外国人の日本の大学への入学試験に使われていた「日本語能力試験」と「私費外国人留学生統一試験」を一つにした形で、「日本留学試験」が実施されるようになったが、日本留学試験の「日本語」試験の目的に「日本の大学などでの勉学に対応できる日本語力を測定する」と、はじめて「アカデミック・ジャパニーズ」という言葉が使われ、その後、「アカデミック・ジャパニーズとは何か」が議論され研究されるようになった。

(大学での) 勉学に必要な力とは、具体的には①-1 講義を聞き取り理解する力、①-2 大量のテキスト、資料、参考文献の読解力、①-3 レポート・論文、発表のための情報収集力、①-4 レポート・論文を書く力、発表をする力、②学内でのコミュニケーション、人間関係を作る会話力などだが、堀井(2003b)では、アカデミック能力=基礎知識+問題発見解決能力+スキルと考えた。知識やスキルだけでは「学び」にならないと考えた。また、問題を明確にするために日本の生活に必要なライフ・ジャパニーズ(LJ)とキャンパス・ジャパニーズ(CJ)をアカデミック・ジャパニーズと分けて考えた。

図1



そして、知識とスキルを使いながら、問題発見解決の流れの中で学んでいくという枠組みから出発することによって、学び(授業)の質も高まり、教育現場からアイデンティティや生きる力につながる、実にさまざまな可能性が出てくると考えた。

今まで、日本語教育の中では問題発見解決能力の育成はあまり注目されてこなかったが、これからは、いかに問題を発見するか、いかにその問題を考えていくか、いかに批判的に物事を捉えていくか、そして、いかに自分が考えたことを伝えていくかのトレーニングを授業の中に織り込んでいくことが必要だと思う。

一方、これらをスムーズに進めるためには、知識はもちろんだが、学習スキルが必要となる。90分の講義を聴きとったり、大量のテキスト、文献を読み、情報収集をするためには、スキミング・スキヤニング、ノートテイク、スキルとしてのアカデミック・ライティング、プレゼンテーションスキル、そして、人間関係を作るコミュニケーション力などを身につけることが効果的である。したがって、これらのスキルを意識的に身につけるトレーニングを授業に盛り込んでいく必要がある。

このように、筆者は留学生に対する日本語教育としてアカデミック・ジャパニーズを考え、自立的学習につながる、スキルと問題発見解決能力の育成をめざしてきたが、一方で、アカデミック・ジャパニーズは、留学生だけに必要なものではないことに気づいた。また、アカデミック・ジャパニーズが、大学の中だけで必要なものでもないことにも気づいた。日本人大学生にとっても、そして、大学を卒業して社会に出てからも、いきいきと生きていく基礎となる力、それを学生は大学にいるうちに、しっかり身につけていってほしいと思う。

本稿では、上記の前提の上で、留学生と日本人学生に対するアカデミック・ジャパニーズ教育の必要性を述べ、その可能性を授業実践の試みを紹介するとともに考察し、その上で、アカデミック・ジャパニーズの定義のための図と授業のためのシラバスから「日本留学試験」の「日本語シラバス」を再考する。

2. 留学生に対するアカデミック・ジャパニーズ教育

2-1: 予備教育との連携: 入学前にA J前半能力を

堀井(2003b)では、留学生は学部入学前にアカデミック・ジャパニーズ(以下A Jとする)前半能力を持っている必要があるとした。A J前半能力とは、基礎知識と(母語による)問題発見解決能力とある程度の学習スキル、すなわち、①-1 講義が「ある程度」理解できる聴解力、聴読解力、①-2 文献が「ある程度」読める読解力、また、教員や職員、そして、日本人学生とのインターアクションができる程度の日本語会話力である。そうすれば、その後の大学の「日本語の授業」で補いながら、大学の授業になんとかスムーズに入っていくことができるようになるからである。

これは、日本語の汎用性と上級レベルまでの学習のしにくさと日本の大学の比較的受身

な授業内容という現実面から、英語圏の大学の入学とは少し違っている¹。A J 前半能力を持つということは、国内の予備教育であれば(現時点では予備教育を日本で受ける学習者が多い)そこまでの学習上で、ライフ・ジャパニーズも身につけることになるし、キャンパス・ジャパニーズは入学に必要な応募手続きや入学直後のオリエンテーションの中で、実際使用場面に合わせて、身につけていけると考える。

日本の大学の学部のカリキュラムには日本語教育があり(北米の大学のカリキュラムにはこれに対応するような英語教育は調べた範囲ではない、ランゲージ・センターは学部に入る前のもの、ライティング・センターは全学的なもの)、そこでは、読解、作文などでA J のスキルを獲得するための授業が行われていることが多いが、通常、大学学部の日本語の授業は、大学の他の授業と並行して行われ、週 1,2 コマ程度しかないので、大学入学後の日本語の授業だけでA J を身につけるのはむずかしいし、A J 力ゼロでは、当然のことであるが、並行して行われる大学の他の授業の理解が非常に困難になってしまう。A J 前半能力を持っていることを前提として学部の日本語教育が行えれば、現在より効果的なものになると思われる。

佐藤(2004)は、「受け入れる学部はどのような留学生を望んでいるか」として「日本語力、基本的知識の豊かさ、思考力、勉学の努力」をあげ、予備教育への期待として「生活上のコミュニケーション能力、日本の社会についての一般的知識と理解、話し言葉形式と書き言葉形式についての十分な知識、中級レベルまでのしっかりとした文法能力(特に構文力)」をあげているが、もう一步踏み込んで、講義や授業内容につながるスキルも加えたい。

留学生がスムーズに留学生活を送るためには、留学生別科・日本語学校・留学生(日本語教育)センターなどの予備教育段階でA J 前半教育までを行い、入学後の学部の日本語教育で、並行して行われる大学の他の授業にスムーズに入っていける事を目的とするA J 後半教育を行うよう連携を図ることが現在の日本の大学への留学においては現実的だと思われるが、現状はどうであろうか。

予備教育といっても内容はさまざまで、民間の日本語学校のクラスは必ずしも進学希望者だけではないであろうし、留学生別科や日本語教育センターは1年で初級から学部入学レベルまで引き上げなければいけなかったり、一方、国立大学の留学生センターは大学院入学への予備教育が主となり、並行的に学部の日本語教育(予備教育ではない)も行っていたりであろうが、学部入学前に求められるものは、A J 前半の能力であることを認識しておきたい。大学入試が終わった後の予備教育終了までの期間はもっとA J 前半教育に当てられるのではないだろうか。

具体的な教育内容としては、大学の実現場面に即した能力をつけるため、講義を聴くことに特化した聴解教育、聴読解教育、授業関連資料のスキミング、スキヤニングをとりい

¹ 堀井恵子(2002)パネルセッション「日本留学試験の「日本語」を考える。「日本留学試験の「日本語」をTOEFLと比較して一「アカデミック」言語力をどう問うか」『日本語教育学会秋季大会予稿集』pp. 249-251参照。今までこの認識が弱かったのではないだろうか。

れた読解教育や、論旨のある作文教育を行い、授業に関するトピックや授業関連語彙(専門語彙でなくてよい)も取り入れることで、学習者の動機付けも上がり効果的だと考える。その際、日本語による問題発見解決能力の育成も少し考慮に入れて教育を行ってほしいと思う。

これについては日本語教育振興協会の「基礎日本語教育研究プロジェクトチーム」による『運用能力獲得のための基礎日本語教育—進学希望者を対象として』が参考になるし、教材としては「日本留学試験の実施に対応した教材開発プロジェクトチーム」による『日本留学試験をめざした語意表と例文集の作成』『言葉・表現トピック 40』や、佐々木瑞枝他による『日本語パワーアップ総合問題集』などが参考になろう。

「日本留学試験」がA J前半レベルをしっかり問う試験となれば、その波及効果も期待され、試験対策問題集もさらに照準の合った効果的なものになるであろう。

2-2：学部留学生に対するA J教育：大学の授業へリンクできるのか

学部での日本語教育はA J後半レベルをつけることをめざしたい。つまり、①-1 講義を聞き取り理解する聴解、聴読解力、①-2 大量のテキスト、資料、参考文献の読解力を深めるとともに、①-3 レポート・論文、発表のための情報収集力、①-4 レポート・論文を書く力、発表をする力の養成と②学内でのコミュニケーション力のレベルアップである。

レポート、論文を書き、発表するということは、問題発見解決能力そのものであるが、大学での学習の中心はやはりここにあることも認識しておきたい。A J後半の最終目標は論文を書き、発表をすることになる。これについては、すでにさまざまな教材が開発されているので参考にしてほしい²。

さて、筆者は大学学部での1年生対象の日本語科目の一つと日本事情科目を担当しているが、日本語科目ではスキル育成を中心に問題発見解決能力育成を、日本事情科目では問題発見解決能力育成を中心にスキル育成を目標に相補的な授業を行っている。A J後半レベルの育成は、実際は1,2年におかれている日本語教育だけでは難しく、それに続く学部専門教育でのゼミ、卒論などで完成されていくと考えているが、そこに「つながる」能力の育成を考えたい。

以下に、A J教育の試みの一部を紹介する。

2-2-1：日本語科目でのA J教育実践の試みから：

留学生導入教育とスキル・シラバス、タスク・シラバス

筆者の担当している日本語2(アカデミック・ジャパニーズ)A B³は学部の1年生の留学生(全員私費留学生)を対象とした科目で、2Aは留学生の導入教育も含めている。留学生に対しては、年度始めのオリエンテーションもあるが、長年の現場経験から日本語科目の中でも持続的に丁寧に導入教育をしていくことが現状では大切ではないかと思われる。

² 「アカデミック・ジャパニーズを考えるための文献案内」(2004)『日本語教育国際研究大会ワークショップ・セッション3』おみやげ資料

³ 他に、会話、読解、作文をメインにした日本語科目がある。

表1（本稿末を参照）は筆者の作ったA Jスキル・シラバスである。これには、キャンパス・ジャパニーズ（C J）、ライフ・ジャパニーズ（L J）もA Jの延長上に含めている（今までは実験をする留学生は担当していなかったのだが、今後は理系の学生も出てくるようなので、このスキル内容も調べて加えていこうと思っている）。

このA Jスキル・シラバスに対応し、実際の留学生のニーズに合わせて、表2（本稿末を参照）の日本語2 Aタスク・シラバスをたて、それにそって、毎回のテーマ⁴（タイトルはあまりアカデミックではないが・・・）を中心にしたタスク作業と、講義理解と情報収集能力育成を念頭においたスキミング・スキヤニング強化トレーニングからなる授業を行っている。タスクには、C J, L Jも入っているし実用性を重視しているが、問題発見解決能力育成の味付けもほどこしている。

味付けの枠組みは以下のものである。

リソース ⇒ タスク提示 ⇒ 話し合い ⇒ まとめ・成果物
発見 考える インターアクション 解決

たとえば、1回目の授業では「MY時間割作り」というテーマで、新入生にとってはまず一番に必要な、しかし、能力試験1級のかなりよい点をとっている留学生でも「難しい」という履修登録に挑戦。すでに、オリエンテーションなどで概略は聞いているはずなので、実際の作業に入る。リソースとしてはこの時期の学生なら持っているはずの（なぜか持っていない留学生も必ずいる）履修要覧、履修要項（シラバス）、学生手帳をつかい、長年の留学生とのおつきあい経験からの読み落としがちな部分（留学生のみ対象の授業科目など）のフォローをし、大学生活において必要な語彙習得、特に漢字の「読み方」をていねいにし、定着を目指す。必要なスキルは、要覧・シラバス・手帳などの情報のスキミング・スキヤニングがメインとなる。ここでのタスクは「MY時間割作り」なので、グループワークで「時間割作りの決め手」を話し合う中で、それぞれが大学生活で必要ないろいろなことに気づき、「自分は大学で何がしたいかをよく考えまとめていくことが、選択科目を決めていく鍵になる」ことに気づいていくよう促す。前年度の先輩の作った時間割も紹介するが、昨今はカリキュラムの変更が多く、こちらもカリキュラムを熟知していないと間違っただけの情報を与えてしまうこともあるので注意が必要である。各自MY時間割を作ってみたら、ペアで相互チェック。相手の時間割を鋭くチェックする。完成したMY時間割は「大学で自分のしたいこと」リストつきで提出・・・これは、次年度新入生の参考にもなるし、当の留学生のポートフォリオとし、その後の学習計画の資料にもなる。

というように問題発見解決の枠組みの中での作業となっている。

もう一つタスク作業内容を紹介してみよう。

3回目の授業では、テーマが「授業理解虎の巻」。授業理解の難しさにめげそうになる留学生が出てくるころあいを見計らって・・・ということであるが、リソースは「授業理解のために努力していること」という題で前回に出しておいた宿題。タスクは「授業理解の虎の

⁴ テーマは留学生へのアンケートや聞き取り調査を中心に決めている。

巻」を後輩に残すことなので、グループワークで宿題に書かれたことを見ながら、わかりにくい授業をあげ、なぜなのか話し合う。先生の悪口(?)も出ることがあるが、そこはフォロー。対策を立てさせることがポイントで、ある程度対策が出たところで、前年度の先輩の虎の巻紹介を紹介すると、そこには、いろいろな実用的な対策が・・・日本人の友達にノートを上手に借りる術(ロールプレイつき)、授業録音のマナー(ロールプレイつき)・・・寝ているときも録音を聞いている・・・S席(最前列)に座るくせをつける、予習復習当たり前、バイトのワナにはまるな、「電子辞書は体の一部」・・・などの学習ストラテジーがある。それらを含めて、後輩への「虎の巻」をそれぞれ書いて提出するのだが、次の日から使える対策が一つや二つはお土産となる。

このように、毎回、授業の1/3～1/2はタスク作業で大学に積極的に関わっていきそうなテーマを中心に導入教育的なストラテジーやスキルを育成しながら、問題発見解決能力育成も図っているが、残りの時間はミニ講義やある程度の長文からのキーワード(キーセンテンス)探しとまとめ文を書くトレーニングを行っている。

タスク・シラバステーマの7, 8, 10は日本語2Bでより深くAJとして対応していくが、他の日本語科目(会話、読解、作文)でも対応していることを付け加えておく。

2-2-2：日本事情科目のAJ教育実践の試みから：体験的学習

勤務校で担当している日本事情科目は、留学生(1年生開講科目)だけでなく日本人大学生(主に2年生以上の日本語教員養成課程履修生)も履修できるので(平成16年度は留学生19名日本人学生27名の46名)、異学部・異学年の留学生と日本人学生の共習による問題発見解決能力を中心にスキル育成もめざした授業としている。授業形態は以下の二つが中心となっている。

①タスクシート作業

VTRと資料を使ったテーマの提示→タスクシートをうめながら、ペアまたはグループで話し合う →ペア・グループの結果発表→個人のテーマについての意見分提出(出席票代わり)といった流れでおこなうもので、テーマは日本の大学生の生活、日本語はあいまいか、日本語ジェンダー、少子化、グローバル化、宗教など。

②グループ発表

グループを作り、テーマを見つけ、それについて調べ、考え、発表をし、発表についての質問やコメントなどのフィードバックでさらに考え、レポートにまとめるといった流れの中で、ここ数年は質問力やコメント力のレベルアップも試みている。

学部によっては3, 4年になってのゼミまでは、あまり発表の機会がない学生が多いようで、留学生も日本人学生も「発表がはじめて」という学生が少なくない。発表の仕方の説明を聞いてというより、実際に発表をしたり、他の発表を聞くことから学ぶことでクラスの発表レベルはだんだん上がっていく。よい発表に必要な条件である、テーマが絞り込んである、データの根拠がしっかりしている、論理的展開がある、そしてプレゼン・スキルである時間配分、段取りなどに、体験的に気づいて取り入れていくからである。

この授業では、留学生はわからない日本語があったときに、日本人学生にすぐに聞け、日本人学生も「生」の留学生情報(留学生の母国の情報も含め)を知ることができるという言語上、異文化コミュニケーション上などのメリットがあることも履修者から認められている。

2-2-3 その他

留学生に対しては、日本語・日本事情科目のほかに、専門スタッフによる学習カウンセリング⁵を日本語授業とは別だてで組織化している。また、日本人学生留学生応援団(サポーター)によるサポートシステムもあり、国際交流センタースタッフ、留学生アドバイザー、留学生の会などととも留学生を中心としたA Jネットワークを構成しているが、専門科目教員との連携やT Aの活用が今後の課題である。また、スキルとしての「予測」も研究課題にしたいと思っている。

3. 日本人大学生に対するアカデミック・ジャパニーズ教育

筆者は留学生への日本語教育だけでなく、前述の日本事情のほかに、学部大学生対象の日本語教員養成課程科目や、ゼミ、卒論科目も担当しているが、日本人大学生へのアカデミック・ジャパニーズ教育の必要性を強く感じ、それぞれの授業にA J教育の味付けをしている。

結論のないレポート、考察のないレポート、資料をまとめただけのレポートを提出するのは学生が悪いのではない。大学入学時まで、また、入学後もアカデミック・ジャパニーズやアカデミック・ライティング教育がほとんど行われていないためだからである。

この点については、2004年度A J Gの3つの研究会へのゲスト講師の知見が参考になる。

3-1 日本人大学生に必要なものは何か

小野(2004)によると、多くの大学で中学生レベルの日本語力しかない大学生の存在が認められたという。そして、大学生に必要な日本語力として、「文学作品を読む力とか、文学的文章を書く能力が必要なのではなくて、専門の講義を聞き、教科書を読み、理解し、資料から必要な情報を読み取り、レポートを書くという基本的な作業のすべてを論理的にスムーズに行える日本語力だといえるでしょう。さらに言えば、卒論を書く、発表をする、就職のための小論文を書くという能力も必要でしょう。」と述べながら、リメディアル教育の必要性をあげ、日本語リメディアル教材を作成している。教材には「この教材が目標とするのはもっと基本的なものです。」とし、「彼らは、講義で先生の言っていることがわからない、教科書を読んでも意味がつかめない、レポートが書けない、・・・どうやって勉強すればいいかわからない、何から手をつけたらいいのかわからない、わからないからやらない、やらないから益々わからなくなるという悪循環に陥っています。この悪循環を断ち切るには、これまでの「国語」の勉強方法とはひと味違う方法が必要です」と述べ、自ら気づかせる→考えさせる(考える楽しさ、驚き)→やる気を出させる(わかったという達成感)→面白い→自信をつけさせるという過程を通して、学習のきっかけを与えることを教材の

⁵堀井恵子(2003)「学部留学生における学習カウンセリングの意義と課題：その2」『日本語教育学会秋季大予稿集』PP. 221-222

目標としている。

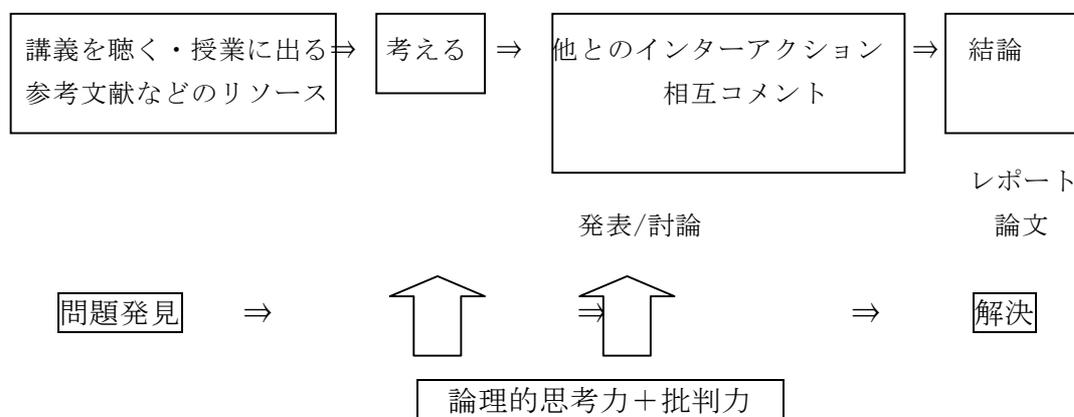
一方、筒井(2004)は富山大学での「言語表現科目」の実践から初年次教育のニーズを述べ、全学必修、少人数、実習的なクラスで、専門教育の基礎となる情報収集、テーマ選び、プレゼン力、インターネット利用などを含めた言語表現力の育成をすることで、従来の国語教育ではない日本人学生対象の日本語教育の構築と、楽しく面白くわかりやすく役に立つ授業のためのFDを提言している。

また、井上(2004)は、日本の国語教育の伝統が文学教育を重視し、形式主義的で、話し言葉を軽視し、生活綴り方・行事作文志向(論理的でない)の傾向があったとして、論理的思考力と批判的思考力の育成の必要性とその教育実践を述べているが、井上(1998)には、基礎学力として①すべての教科を学習する際に、その基礎となる学力③実社会に出て役立つための基礎となる学力をあげ、「知識ではなく、知識を獲得する仕方を身につけていること、また自ら問題を発見し考えていこうとすることこそ重視すべきであろう」と述べ、その育成には「集団思考としての討論、話し合いをさせることが効果的」と述べている。

これらから、日本人大学生には大学入学時まで、基礎学力ともいえる、論理的思考力、問題発見解決能力があまり育ってきていないことが再認識され、入学後にそれらの教育が必要であることがわかる。

3-2 大学で「学ぶ」ということ

前にも述べたが、大学で学ぶときに中心になるのは講義を聴く、授業に出ることである。これを、参考文献などのリソースとともに、さまざまなことに気づく、問題発見の場とし、それぞれが気づいたテーマ(これには大きなものからとても小さいものまでいろいろあるが)について、自らよく考え、そして、最終的に問題解決、つまり、結論としてのレポートや論文にまとめるために、発表や討論によって、自分以外の他とのインターアクションや相互コメントを体験する。このプロセスを全体が、「大学で学ぶこと」の中心であると考えられる。



したがって、留学生や日本人大学生がこれらを行うときに大切なことは、それらを論理

的にとらえていくことである。そこには批判力も必要となる。これらの力の養成が、特にこの論理的思考力と批判力の育成が、今まであまりなされてこなかったことは前述のとおりである。

では、大学入学後、どうしたらこれらの力を育成することができるのであろうか。一つは初年次教育の充実である。これについては東京水産大学「大学生のための表現法」授業資料製作グループ(2003)の実践も参考になるが、その他に、大学のそれぞれの授業をA Jの枠組みで行うことも提案したい。授業を行う際に、気づかせる、考えさせる、インターアクションを起こさせる、そして論理的解決を表現させることをもっと意識的な枠組みとして持つことである。これは多くの授業に取り入れられる方法でもあり、また、初年次教育が充実したあとを受け、A Jを完成させていく部分でもあるだろう。

ここで、日本人大学生が多くを占める授業での試みの一つを紹介する。

3-3 日本人学生対象の日本事情科目におけるA J教育実践の試みから

これは筆者の本務校以外での授業であるが、履修者が120名近くでほとんどが日本人学生(文学部の2-4年生)の一般教養の位置づけのクラスである。ここでは、通年科目の後期の部分のみ紹介する。後期授業では人数の多いことを生かして「発表マラソン」と名づけ、前期のレポート試験(試験の形態で短いレポートを書く)で書いた内容を各自5分で発表、指定質問者が質問をしていくという形態で1コマの間に10人が発表をし、それを11回続けた。発表者以外の学生は指定質問者も含めて各発表のコメントを書き、発表者は次の週にこの100人以上からのコメントを受け取っている。「マラソン」の意味は、それぞれの発表から次の人が学習して継続してプレゼンレベルを上げていく目的があったからである。発表が問題発見解決の枠組みになっているか、質問やコメントが適切かについては、教員から適宜気づきを促した。発表が始めて、特に聞き手が多い発表や、このような授業形態は始めてという学生の感想が多かったが、充実した内容のものとなった。この授業に関するアンケート結果は以下のとおりであった。

1. この授業で身についたと思えること：複数回答のものを多い順に

- ・問題を発見し、考察し、自分の意見を持つこと
- ・以前よりも世界や社会、日本のことを客観的に観察できるようになった。
- ・物事のプラスマイナスを考えるようになった。
- ・コメントをもらうことで(100名以上の)自分の発表についての気づきが多かった、また、同じ発表に対していろいろな反応があることがわかった。自分と違う意見の人がいることがわかった。

2. この授業を受けて考えた 21 世紀を生きる人間に必要な力とは：複数回答のものを多い順に

- ・発信力、コミュニケーション力、行動力、
- ・自分の意見を持ちそれをわかりやすく論理的に伝える力
- ・問題発見解決能力
- ・人の意見を聴くこと
- ・社会や自分の国のことについて語れる。政治・経済など、いろいろなものに関心を持つ

- ・情報を鵜呑みにしない、メディア・リテラシー
- ・多様な価値観

学生の記述を一つ

▼この授業を受けるまで、人の意見を聴いたり、人の発表を聞いた入りする時間がとても退屈な時間だった。この授業の最初も、この気持ちが変わることはなかった。しかし、授業が始まる中、退屈な時間から自分の考えを上げられる楽しい時間へ代わっていった。・・・発表してくれた方々は自分の意見を持ち、論理的に発表されていたと感じた。・・・社会に出てからも、自分の考えをもたない人は、目標をもてないから努力ができないだろうし、自分の意見を伝えられないでは、他の人を動かすことはできないだろう。また人の意見を聞かない人は自分の考えに固執し、他から何も得られることができないだろう。

この授業も体験的にA J力をいくらかつけることができたと思われる。発表からは筆者も自分の枠組みを超えたものが出てくる面白さを味わえた。

3-4 日本人学生に対するA J教育の必要性

大量の本の速読経験がない、キーワードがつかめない、結論をきちんと出した経験がない、オリジナルな意見を要求されたことがない、発信しない、批判的志向をもったことがない・・・残念ながら、これが現在の平均的な大学生の入学時の姿であり、一方で、予習も復習もいらず、授業に出るだけまし、レポート課題を出す科目はそれほど多くなく、出したとしても試験同様フィードバックがないのがあたりまえ(理系科目や専門科目の一部を除く)というのが現在の日本の平均的な大学の授業の現実であるとしたら、日本の大学にはもっとA J教育(言語教育、表現教育、リテラシー教育)が必要であると思う。「沈黙は金」などといった日本人のコミュニケーションの特徴は、グローバル社会ではもはや評価されない。発信型の人間が求められている。

ACTFL-OPIの超級話者には、「意見の裏づけができる、仮説が立てられる、具体的な話題も抽象的な話題も論議できる」ことが求められている⁶が、これも、A Jに通じるものと思われる。

「アカデミック・ジャパニーズ」を考えることは、日本語教育・留学生教育だけでなく、日本の教育や大学教育の改善(FD)に関わらざるを得ない本質的なことである。

大学入試の形態の変更や、教員の教育についての哲学が求められていると思う。

4. 日本留学試験の「日本語シラバス」再考

以上を考えてきた最後に、この科研のテーマ「アカデミック・ジャパニーズ」ということばの「産みの親」である2002年6月から実施されている日本留学試験の「日本語」シラバスについて、再度考えてみたい。

堀井(2002a)では、この「日本語シラバス」について「「アカデミック・ジャパニーズ」の範囲やレベルを、もう少し誰にでもわかるように、シラバスで提示することはできない

⁶ ACTFL-OPI試験官養成マニュアル1999年改訂版より

のだろうか。それによって、この試験に対する本質的な理解が大きく深まるものと思う。」として、

「最終報告」の「日本語シラバス」の「I 測定対象能力の概念図(p. 12)」は、抽象的で、たとえば、図中に書かれている「学習スキル」についての「(1)事務手続き処理能力(2)学習活動スキル(3)研究活動スキル」という項目と比べて「生活スキル」や「社会知識」の項目は具体性がなくわかりにくい。測ろうとする能力として、生活スキル・学習スキルの技能に向けた網掛け部分が大きい。この網掛けだけでは、測ろうとする範囲やレベルがつかみにくい。スキルの重要性は理解できるが、これをどのような方法で問うことができるのかとなると、もっと、議論が必要なのではないだろうか。「日本での大学生活を送る上での日本語によるコミュニケーション能力」と「日常生活・留学生活に必要なスキル」との関係もわかりにくい。

またII「試験が想定する課題の類型」～X「試験の課題を達成するために前提となる知識」に挙げられた項目は、よく分析されているが、あまりにも網羅的で、それらのすべてを複合的にとらえて実際の問題と結びつけていくのは非常に難しい。

と述べたが、シラバスをわかりやすくという点では、筆者作成の表1（本稿末を参照）は参考になるのではないだろうか。また、本論「はじめに」にあげた図1も参考になるのではないだろうか。

ライフ・ジャパニーズやキャンパス・ジャパニーズも含めて、重点を置くべきものからスキルやタスクを整理し、まとめていくこともできる。

しかし、アカデミック・ジャパニーズでもっとも大切なことは、キャンパス・ジャパニーズではなく、講義理解やレポート作成につながる、問題発見解決能力を含めたものであることを、再度述べておきたい。A J前半能力としてあげたものを「日本留学試験」の「日本語シラバス」として整理することは有効ではないだろうか。

日本留学試験の「日本語」試験は適切な方向に向かっているように思う。当初から「知識」でなく「能力」を問う点は、作問の難しさはあるとしても評価されていた。筆者としては、試験の照準をさらにA J前半能力を問うものに向けてほしいと思う。そうすれば、大学学部入学に必要な日本語力の実態に近くなり利用もしやすくなる。各大学がいまだに行わざるを得ない大学独自の試験もしなくてよくなるかもしれない。さらに、波及効果も大いに期待される(英語試験も TOEFL を使わないようになる方向と聞いている)。

6. おわりに

山本(2004)はA Jの定義を「大学、大学院などでの学術分野のみならず、卒業後の職業生活や社会生活で営まれる知的活動を通して使用される高度な日本語」として、そのために必要な論理的・分析的・批判的思考法は「高校までに育てるのは難しい」と述べている。

4回の実施を終え、「日本留学試験」が当初めざした渡日前入学許可は増えたのだろうか。波及効果はどんなものであったのだろうか。留学生政策は今後どう進められていくのだろうか。

グローバル・スタンダードで留学生教育を考えていく時代となった今、日本語の汎用性はさておき、日本の大学の教育の質が大きく問われていくだろう。教員には豊富な知識を伝えるだけでなく、「学び」のための環境設定力が今まで以上に必要とされてくるであろう。その意味では、アカデミック・ジャパニーズという概念からの示唆が大いに生かされていくのではないだろうか。「アカデミック・ジャパニーズ」教育についての持続的な研究を今後もさらに続けていきたいと思う。

参考文献

- 井上尚美(1998)『思考力育成の方略-メタ認知・自己学習・言語論理』明治図書出版
- 井上尚美(2004)「母語教育の日米比較と大学での日本語教育」アカデミック・ジャパニーズ・グループ第4回研究会レジュメ
- 佐々木瑞枝他(2000)『日本語パワーアップ総合問題集』ジャパントイムズ
- 佐藤政光(2004)「学部教育におけるアカデミック・ジャパニーズを考える」『東京外国語大学留学生日本語教育センター移転記念シンポジウム資料』
- 東京水産大学「大学生のための表現法」授業資料製作グループ(2003)『大学生のための表現法』
- 筒井洋一(2004)「日本語表現法科目の歴史と課題」アカデミック・ジャパニーズ・グループ第3回研究会レジュメ
- 日本語教育振興協会、基礎日本語教育研究プロジェクトチーム(2001)『運用能力獲得のための基礎日本語教育—進学希望者を対象として』
- 日本語教育振興協会、日本留学試験の実施に対応した教材開発プロジェクトチーム(2004)『言葉・表現トピック40』
- 堀井恵子(2002 a)「「日本留学試験」とその「日本語試験」：今後の活用へむけての課題と提案—シラバスと試行試験を分析して」『留学生教育』第7号、pp. 145-158
- 堀井恵子(2002 b)「アカデミックジャパニーズとは何か—どのようにその力をつけていけるか」『東アジア日本語教育国際シンポジウム論文集』pp588-593
- 堀井恵子(2003 a)「日本人大学生に対する「日本語(スキル)」教育の可能性」『武蔵野女子大学文学部紀要』Vol. 4pp. 1-9
- 堀井恵子(2003b)「学生が大学入学時に必要な日本語力とは何か—「アカデミック・ジャパニーズ」と「日本留学試験」の「日本語試験」を整理する」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ科研中間報告書』pp. 113-122
- 堀井恵子(2003c)「「日本留学試験」の提起する「アカデミック・ジャパニーズ」を教育にどう生かすか」『第6回 国際日本研究・日本語教育シンポジウム「日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク」予稿集』p. 13
- 堀井恵子(2004)「日本人大学生に必要な「日本語力」とは何か。それはどのように育てることができるのか。」『武蔵野女子大学文学部紀要』Vol. 5pp. 19-25
- メディア教育開発センター(2004)『日本語リメディアル教材』

表1 アカデミック・ジャパニーズ・スキルシラバス

アカデミック・ジャパニーズ	講義	授業前	予習:(課題)図書を読む(スキミング・スキヤニング速読)
		参加	聴く(聴解)
			ノートテイク
			板書読み・資料読み(聴読解)
			質問に答える、質問をする
		授業後	復習:わからなかった点を調べる
			課題(宿題)遂行
	ゼミ	授業前	情報収集(図書館・コンピュータ利用)
			レジュメ・スクリプトづくり
		参加	他の発表を聞く:質問力、コメント力
			発表(プレゼン)をする:質問、ディスカッションをシキル
		授業後	レポートにまとめる
	実験		実験をする
	試験	試験前	情報収集(試験時間、場所、条件、内容など)、まとめ学習
試験後		評価チェック	
レポート	提出前	情報収集(テーマ、字数、用紙、提出方法などの形式など)	
	提出	アカデミック・ライティング	
キャンパス・J	教務課関係		履修要綱の理解・登録など
	学生課関係		掲示板(休講、諸連絡、呼出、行事)読み取り 諸手続き(長期欠席、休学など)遂行
	教員と	面談など	アポ取り、質問、伝達、お礼など
	職員と		問い合わせなど
	学生と		授業などについてのやりとりなど
	サークル活動		先輩後輩関係語
ライフ・J	友人などと		ため語
	アルバイト先		敬語・業務遂行
	地域社会		公共施設(役所、駅、病院など)利用、買い物、近所づきあいなど

表2 日本語2A タスク・シラバス			
時間	テーマ・タスク	目的・内容	当日までの宿題
1	MY 時間割作り	大学生活において必要な語彙習得、履修システムの理解	履修要覧、シラバス、学生手帳持参
2	一度で覚えてもらう 自己紹介 日本人の友達作り	名前覚えゲーム 留学生応援団とのお見合い	自己紹介原稿
3	授業理解の「虎の巻」	大学の授業の組み立てなどを知る。前年度「虎の巻」紹介	授業理解のために工夫していることリスト
4	読みたい本を借りて くる図書館体験	図書館のシステムを知る。 ロールプレイ	読みたい本リスト
5	書き言葉と話し言葉の 違い完全理解	実際に書いた文を互いに 考える	作文：大学生活でびっくりしたこと 日本人学生コメント入り
6	感じのいい問い合わせ	学生課・教務課・その他の場面における感じのいいコミュニケーションを考える(ロールプレイ)	問い合わせで困った場面リスト
7	A がもらえるレポート紹介	アカデミック・ライティングの基礎・インターネット利用の注意点	レポートについてわからないことリスト
8	みんなに聞いてもらえるプレゼン紹介	プレゼンテーションの基礎	プレゼンについてわからないことリスト
9	70点以上の試験解答	「先輩の失敗談」紹介	試験についての心配リスト&情報収集
10	スピーチコンテストで 優勝しよう	コンテストを目標にたくさんの人に 伝わる話とは何かを考える	スピーチ原稿
11	幹事はあなた！安くておいしくて楽しいクラス懇親会の企画	前例紹介	候補のお店リスト
12	リーダーはあなた！お客さんを集められる学園祭参加	前年度の紹介	学園祭企画書
13	トラブル・お悩み 一気に解決	大学内で起こりうるトラブルについて考える	トラブル・お悩み紹介文
14	まとめ		

*毎回の授業は上記にスキミング・スキニングトレーニングを加えている。

*日本語2B ではアカデミック・リスニング、リーディング、ライティング、スピーチが中心となる。

*毎回のタスクはポートフォリオになる。